

その次ぎは襦袢で、これも亦角をまん中に集め、又裏の方へ同じよりに、又その裏の方へ同じよりに折り、七圖のよりにして、その「イロハ」の三つの所をひろげて 八圖の「イロハ」のよりにし、襦袢にいたします。

又その次ぎの折り方わ、襦袢の通りですが、ひろげる所を二ヶ所にして、他へ二ヶ所を 九圖のよりに立て、車にいたします。

一口ばなし

▲旨の按摩が、暗の夜の暮れ方、或家へ灯燈を借りに來たので、『旨の癖に燈りを何にするのだ』と云ふと『なーに、目明さが衝き當るといけなから』といつた。そこで、なる程と感心をして借して呉れた。

▲其旨が、灯燈を持つて 歩いて居て、暫く行く、向ふから、人が來て、イタイといふ程衝き當たので大に腹を立て、『目明さの癖に、旨に衝き當るとは、お前さんもよく〜間拔けた、此灯燈が目に入らないのか』といつて、きめ附けた所が、『なんだ、火の消えた灯燈を持つて歩いてるでないか』

▲一人の鬘の紳士が 獵銃を肩にして、さも心配らしく、獵から歸つて來る處へ、其の友達で、これも、鬘の先生、例の通り、遠方から大きな聲で、『やい、お歸り、何か取れましたか』すると獵の先生が、さも方なさそりに『オー、君、今日は大變な失敗で、たつた今玉を外らして、人に當てね』『や、そーか、夫をツケヤキにすりや、甘いな』